

対照言語学

生越直樹 — [編]

東京大学出版会

シリーズ言語科学 — 4

対照言語学

江苏工业学院图书馆
藏书章

東京大学出版会

シリーズ言語科学 4 対照言語学

2002 年 11 月 20 日 初 版

[検印廃止]

編 者 生越直樹

発行所 財団法人 東京大学出版会

代 表 者 五味文彦

113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内

電話 03-3811-8814 Fax 03-3812-6958

振替 00160-6-59964

印刷所 株式会社精興社

製本所 矢嶋製本株式会社

© 2002 Naoki Ogoshi

ISBN 4-13-084074-6 Printed in Japan

Ⓔ〈日本複写権センター委託出版物〉

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

刊行にあたって

言語研究の歴史は非常に古い。インドでは紀元前5世紀頃パーニニによる精緻なサンスクリット文法が現れ、ギリシャでもほぼ同じ時期にアリストテレスらの萌芽的研究を経て、紀元前1世紀頃にアレクサンドリアで整然としたギリシャ語文法体系が成立している。こうした文法は、綿密な観察を含みながらも、解釈のための補助学問としての実用的性格が強かった。これに対し、言語を自然現象と同じように、そのありのままの現実において記述、説明しようとする研究態度は比較的新しく、20世紀初頭になってはじめて明確な形で現れてくる。

こうした研究態度が現れてくる背景には、その当時の学問全体を取りまく認識論的基礎づけの要請と、特に言語研究それ自体の発展があった。具体的には、18世紀末からの印欧比較文法によるさまざまな音韻変化の法則の発見や言語の系統的親近性の確定や祖語の再構などの成果があげられる。ところが、そうした研究成果の集積が、逆に学問的基盤の不確かさを明らかにし、より確固とした説明概念の上に、学問を基礎づける必要性を感じさせた。こうして、言語学を科学として成立させるための概念の整理や研究対象の確定の努力がなされ、20世紀を代表する学問的成果としての言語学が誕生することになる。

その後も、言語学は20世紀を通じ、たえまなく大きな変革を経験してきている。世紀前半は音韻論主導の言語学であり、世紀半ばからは生成文法を中心とする統語論主導の言語学であった。60年代から始まった本格的な意味研究は、80年代にいたり明確な問題意識に裏うちされた認知言語学を生んだ。また、外的には人工知能における知識表現や計算機科学の工学的言語処理などからも大きな影響を受け、現在、言語についての考え方、研究方法が大き

く変わろうとしている。この時期にあたり、言語研究をもう一度じっくり見直してみることはまことに意義深いことと思われる。

『シリーズ言語科学』は、言語学の立場から、現在の言語研究で特に重要と思われるいくつかの領域にしばり、最新の知見を提供する。各巻は統一テーマをもち、それぞれの分野で進行中の研究を中心に構成されている。各巻の収録論文を通読することで、それぞれの分野の研究動向を知り、かつ近未来の研究動向も予測できるであろう。個々の収録論文は、専門的でありながらも、狭い専門性に閉じこもることなく、さまざまな工夫を凝らして知的好奇心を刺激し、創造的議論が広がるきっかけになるように書かれている。全体の構成は以下の通りである。

第1巻『文法理論：レキシコンと統語』

近年、統語構造を動詞などの語彙情報の投射として捉える立場から、統語とレキシコンの関係が注目を浴びている。たとえば、動詞意味論の研究は、語彙の意味を捨象しては解明できなかった種々の構文交替現象などに興味深い知見を多数もたらした。こうした研究の特徴は、データに支えられた実証性である。統語研究が先進性を追って、極度に抽象化し、ややもすれば実証性がなおざりにされる中で、実証性と理論的意義のバランスのとれた研究の重要性が増している。この巻は、こうした研究の流れを踏まえ、レキシコンと統語論との関係を軸にさまざまな視点からの文法理論研究を採録する。

第2巻『認知言語学Ⅰ：事象構造』

言語は、人間が世界と関わる主要な手段であり、人間の経験や思考が色濃く反映する。認知言語学は、言語がとりわけ思考の問題であるとする言語観に立ち、言語を人間の認知プロセスの反映と捉え直すことにより、言語研究に新たな地平を開いた。こうした考え方からすれば、語は物や行為についての概念化であり、統語構造も人間の主体的事態把握の反映であり、動作主などの意味役割は認知的ゲシュタルトとして捉える必要がある。この巻では、事象構造 (event structure) をカバー・タームとして、事象の把握や輪郭づけ、知覚のメカニズムと言語の関係を明らかにする。中心となるのは、移動や行為のような事態把握の本質、事象の輪郭づけとしてのアスペクトやテンス、知覚の参照点としての主語の再規定、非典型的主語や二重主語文の本質、

構文スキーマの談話機能の探究である。

第3巻『認知言語学II：カテゴリー化』

人間の認知研究に対する、現代の言語理論の最も重要な貢献の一つは、疑いもなくカテゴリー化の研究である。言語学は、メタファー、メトニミー、プロトタイプのカテゴリーなどを精力的に研究することで、自然言語のカテゴリーが、従来考えられてきたような静的なものでなく、必要に応じ、その場で作られたり、組み換えられたりする、きわめて柔軟かつ動的な対象であることを明らかにした。また、文法カテゴリーについても、プロトタイプやそこからの拡張プロセスの研究は多くの成果をあげている。この巻は、カテゴリー化について体系的なパースペクティブを与え、言語を通じて人間の認識を探ろうとする関心にこたえる。ここでは、空間カテゴリーの分節、メタファーやトートロジーのような言語の創造的使用、さらに文法カテゴリーの歴史的変容や多層性などが扱われる。

第4巻『対照言語学』

世界に生起する無限に多様な事象は、解釈され、概念化され、少数の表現形式にはめ込まれる。表現形式は、認知的概念化プロセスの反映である。しかるに、従来の対照研究は、世界のもろもろの言語間に存在する類似や差異の基底にある概念化プロセスに目を向けず、自明のごとく想定されたいくつかのカテゴリー（たとえば、主語、ヴォイス、モダリティ）を取りあげ、それらを比較対照し、類似や共通点を指摘するに留まった。この巻は、こうした既成の概念枠に捕らわれることなく、同一の事象がそれぞれの言語でどのように語彙化、構造化されるかといった問題を扱う。こうして、言語化の過程に見出される言語間の共通性と個別性を探りだし、言語間の概念化に関する普遍性と多様性の一端を浮き彫りにする。

第5巻『日本語学と言語教育』

言語学は、母語話者が自分の言語についてもつ知識の解明を目指す。この探究は、一切の応用を考えなくても、それ自体の存在理由をもち、多くの研究者をとらえて放さない、魅力あふれる科学的営為である。しかしながら、国際化にともない、母語以外の言語を習得する必要もかつてないほど痛切に感じられるようになってきている。この時期にあたり、言語学が語学教育に対してどのように貢献できるかという問題は、言語学の将来を考えるにあた

り、かつてない現実的な問題になっている。この巻では、日本語研究を始めとして、外国語学習における母語知識の干渉や誤用の問題、さらに言語学が語学教育にどのように貢献できるかなど、広い範囲に渡り言語学と語学教育の問題を扱う。

本シリーズは「言語情報科学」第Ⅱ期として、第Ⅰ期『シリーズ言語態』を受けて刊行される。「言語情報科学」は、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻が中心になって構想された。しかしながら、シリーズ第Ⅰ期、第Ⅱ期とも、大学の制度的枠組みを越えて、それぞれの学問の理想像を書物の形で実現してみせることで、言語情報科学のありうべき姿、ひいては学問、大学教育の理想像を描き出そうと心がけた。われわれのそうした意図のいくぶんかでも感じ取っていただければ、執筆者ともども幸いである。

『シリーズ言語科学』編集委員会

坂原茂（編集代表）・伊藤たかね

西村義樹・大堀壽夫

生越直樹・上田博人

目次

序 対照言語学の展望	生越直樹	1
------------------	------	---

I 方法論

1 言語類型論と対照研究	柴谷方良	11
--------------------	------	----

- 1 はじめに (11)
- 2 対格型言語と格, 主語, ヴォイスおよび項構造 (13)
- 3 能格型言語 (18)
- 4 フィリピン・タイプの言語 (26)
- 5 文法機能による統一的把握 (39)
- 6 むすび (45)

II 構文の多様性

2 日本語とスペイン語の使役性の比較	上田博人	51
--------------------------	------	----

- 1 はじめに: 目的 (51)
- 2 語彙的な使役動詞 (52)
- 3 複合動詞 (56)
- 4 複文 (67)
- 5 まとめ (69)

- 3 日本語・朝鮮語における連体修飾表現の使われ方 ……生越直樹 75
——「きれいな花！」タイプの文を中心に
- 1 ここで扱う問題 (75)
 - 2 [A+N] 構文についての先行研究 (77)
 - 3 日本語の [A+N] 構文 (78)
 - 4 朝鮮語の [A+N] 構文 (82)
 - 5 日本語と語の違いについて (91)
 - 6 他の名詞文との関係 (94)
 - 7 残された問題 (96)
- 4 概念化と構文拡張——中心的与格構文から周辺の与格構文へ …武本雅嗣 99
- 1 はじめに (99)
 - 2 認知プロセスとプロファイリング (101)
 - 3 身体性を基盤とする与格構文 (106)
 - 4 事象認識と統語構造 (111)
 - 5 まとめ (118)

III 意味の広がり

- 5 テンス・アスペクトの比較対照 …井上優・生越直樹・木村英樹 125
——日本語・朝鮮語・中国語
- 1 目的 (125)
 - 2 日本語と朝鮮語のテンス：非過去形と過去形の使い分け (126)
 - 3 日本語と朝鮮語のアスペクト：非状態形と状態形の使い分け (130)
 - 4 日本語と朝鮮語のテンス・アスペクト (まとめ) (144)
 - 5 中国語のアスペクト (146)
 - 6 まとめ (156)
- 6 「も」と“也” ……………楊 凱榮 161
——数量強調における相異を中心に
- 1 はじめに (161)
 - 2 基本義としての「も」と“也” (162)
 - 3 「数量詞+も」と「名詞+も」との違い (164)

4	“也+X”と“X+也”(170)	
5	終わりに(180)	
7	時間から空間へ?定延利之	183
	——〈空間的分布を表す時間語彙〉をめぐって	
1	はじめに(183)	
2	先行研究(183)	
3	〈空間的分布を表す時間語彙〉(187)	
4	視野仮説(188)	
5	視野仮説の有効性と不十分さ(189)	
6	探索仮説(192)	
7	空間から時間へ, 時間から空間へ(195)	
8	デキゴト論への影響(196)	
9	〈空間的分布を表す時間語彙〉の言語差(200)	
10	インタラクションの文法(209)	
11	おわりに(211)	
8	指示詞の歴史的・対照言語学的研究——日本語・朝鮮語・トルコ語金水 敏・岡崎友子・曹 美庚	217
1	はじめに(217)	
2	現代日本語の指示詞(218)	
3	日本語の指示詞の歴史的変化(228)	
4	現代韓国語(235)	
5	参考: 現代トルコ語(239)	
6	最後に(243)	
9	所謂「逆条件」のカテゴリー化をめぐって藤井聖子	249
	——日本語と英語の分析から	
1	はじめに(249)	
2	予備観察と概観(253)	
3	類似性: スケール性の譲歩条件構文の意味構造(256)	
4	EVEN IF 構文とテモ構文との相違: 話者の認識論的態度の文法化の程度 (260)	
5	英語と日本語との相違: 逆説性と非条件性の文法化の程度(261)	
6	EVEN IF 構文とテモ構造との相違: スケール性含意の有無による相違	

(265)	
7 テモ亜形構造:「非条件性・並列性」の表出メカニズムのパリエーション (271)	
8 EVEN IF 構文とテモ構文との相違: 中枢的意義の相違による拡張性の相違 (274)	
9 結語 (275)	
10 「来る」と「行く」の到着するところ ……………中澤恒子	281
1 はじめに (281)	
2 Fillmore の分析: “come” と “go” の条件 (282)	
3 英語: 聞き手が到達地の場合 (288)	
4 日本語: 動作主が話し手の場合 (292)	
5 中国語: 聞き手が到達地の場合 (297)	
6 まとめ (300)	
索 引 ……………	305

序

対照言語学の展望

生越直樹

1 対照言語学，比較言語学，言語類型論

対照言語学 (contrastive linguistics) が登場したのは、1950 年代から 60 年代にかけてだとされる。対照言語学的研究 (対照研究 (contrastive study)) は、複数の言語体系を比較し、その異同から対象とする諸言語の特徴を明らかにしようとする。対照言語学が登場した当初、対照研究の成果は、たとえば、外国語学習者が犯しやすい誤用のメカニズムを解明し、外国語教育に大きく寄与するものと考えられた (こうした研究を特に「誤用研究」という)。対照研究は外国語教育に有用な部分もあったが、その後の研究で、外国語学習者の誤りの表れ方と対照研究の成果が必ずしも一致しないことが明らかになり、最近では外国語教育における対照言語学的観点の限界が指摘されている。しかし、その一方で、様々な言語現象を対照言語学的観点から考察することにより、言語の普遍性と多様性という、より理論的な問題に取り組もうとする研究が行われはじめ、対照研究は新たな段階にさしかかっている。

対照言語学は、複数の言語を比較するという点では、比較言語学 (comparative linguistics) とよく似た特徴を持っている。比較言語学は、そもそもの出発点である印欧比較文法に見られるように、比較の対象を系統関係にあると考えられる言語に限定し、対象言語の異同をもとに共通の祖語の再構をめざす、通時的な言語研究の方法である。これに対し、対照言語学は比較の対象となる言語を限定せず、異なる言語を比べるだけでなく、同一言語の古い時

代の体系と現在の体系、あるいは同一言語のいくつかの方言を比べることも可能である。

また、対照言語学は、言語を比較し、言語の普遍性について考察するという点では、言語類型論 (typology) とも近い関係にある。言語類型論は、系統関係や地域的隣接による影響がないと想定される多くの言語を比較することで、系統関係や影響関係がなくても現れてくる言語の普遍的特性を明らかにするとともに、言語間の違いを説明できる何らかの法則・原理を見出そうとする。従来は、対照言語学が外国語教育など応用分野への貢献をめざすのに対し、言語類型論は言語理論面への貢献をめざす点で、方向性が異なると見られてきた。しかし、前述のように、近年の対照研究は、単に言語間の個別的な異同について論じるのではなく、言語の普遍性と多様性の追究を背景とした研究になりつつある。そういう点で、対照研究と言語類型論の研究は、以前に比べその境界がはっきりしなくなっている（言語類型論と対照研究の関係については、本書所載の柴谷論文を見られたい）。

2 本書の狙い

前節で述べたように、現在の対照言語学は登場した当時とは異なる発想のもとで、新たな研究が推し進められる段階にある。本書は、そのような対照研究の進展を示すべく企画された。

人間を取り巻く世界に生起する事象は無限に多様であるが、言語の語彙や構文パターンは有限である。無限の事象は、概念化プロセスを経て有限個の表現形式の鋳型にはめ込まれる。言語の表現形式は、世界に対する概念化の現れであり、ひいてはその言語を話す人々が共有する認知パターンの反映でもある。

ところが、従来の対照言語学は、言語間に存在する類似、差異の基底にあるこうした概念化プロセスに目を向けず、自明のごとく想定された種々の文法カテゴリー（たとえば、「主語」「ヴォイス」「モダリティ」など）を取り上げ、それらを比較対照し、相互の異同や共通点を指摘するにとどまった。

本書は、既成の文法カテゴリーの枠に捕らわれることなく、何よりもまず、同一の事象がそれぞれの言語でどのように語彙化、構造化されるかといった

点に関心を寄せる。それを通して、言語化の過程に見出される言語間相互の共通性と個別性を探り出し、言語間の概念化に関する普遍性と多様性の一端を浮き彫りにしようとする。

3 本書の構成と収録論文

本書は、「I 方法論」「II 構文の多様性」「III 意味の広がり」の3つの部分からなる。第I部の「方法論」では、対照言語学の方法論および対照言語学の位置づけについて考える。柴谷方良の「言語類型論と対照研究」は、包括的な観点から対照研究の方法とその可能性について言及したもので、本書の巻頭論文的な性格を持つ論文である。

柴谷論文は、まず、類型的に異なる言語の分析を通して、我々の文法観がいかに類型的にバイアスのかかったものであるかを指摘する。その上で、類型的に異なった体系を統一的に捉えるにはどのような方法があり得るのかを考え、対照研究のあるべき姿を論じる。柴谷論文では、言語を比べる際にもって同じ、あるいは異なると言えるのか、内容的に異なるものをいかなる観点において統一的に捉えうるのかという最も基本的な問題が扱われている。

具体的には、類型的に異なる対格型、能格型、フィリピン・タイプという3つのタイプの言語を取り上げ、基本的な文法概念とされる主語、およびそれと深く関わるヴォイスの現象について分析を行っている。分析を通して、主語が対格型言語を基盤に形成された文法概念であり、それをそのまま能格型言語やフィリピン・タイプの言語に援用することは問題があるとし、言語の類型的な相違も機能という観点に立てば統一的な解釈が可能となり、言語間の類似や文法範疇の普遍性も終局的には機能面での類似あるいは共通性と把握されることになる」と述べている。

第II部の「構文の多様性」では、ある事象をどういう構文で表現するかという点、つまり、言語間の構文の表れ方に注目した論文を集めた。構文的な相違とその背後にあるシステムの共通性を論じた上田論文、逆に構文的な類似とその背後のシステムの相違を論じた生越論文、構文的な類似・相違からそれを左右する要因について論じた武本論文の3編である。

上田博人の「日本語とスペイン語の使役性の比較」は、文法的な使役性について日本語の派生動詞、複合動詞、複文をスペイン語の派生動詞と再帰動詞、HACER+不定詞構文、複文と比較したものである。上田は日本語とスペイン語が表面的にかなり異なる構造を有しているにもかかわらず、使役性に関する両言語の諸形態の間には明確な対応関係があることを指摘している。このように形式と意味の関係において、両言語に共通するものが認められるならば、その部分については共通の原理を見出す方向で考えるべきだとする。いたずらに各言語の個別性を主張するのではなく、共通する点は共通するものとして捉え、そうすることにより個別の言語の特徴もより明確になるのだと主張する。

生越直樹の「日本語・朝鮮語における連体修飾表現の使われ方——「きれいな花!」タイプの文を中心に」は、「きれいな花!」のように主語がなく形容詞の修飾成分を伴う名詞文（[A+N] 構文）が、日本語と朝鮮語にともに存在しながらその使用条件が異なることに注目し、使用条件の差が何に起因するのかについて論じたものである。生越は、両言語ともある状況の発見やそれに対する驚きを表現するとき [A+N] 構文が使われること、朝鮮語の [A+N] 構文は使用条件が厳しく、表現しようとする事柄が客観的な事柄か否かという要因、聞き手との間で了解されている情報が新しい情報かという要因がその使用に影響していることを明らかにしている。さらに、名詞単独文においても同様の傾向があることを指摘し、[A+N] 構文の使用を左右する要因がより広範囲な現象にも影響していることを示唆した。

武本雅嗣の「概念化と構文拡張——中心的与格構文から周辺の与格構文へ」は、主としてフランス語、ドイツ語、スペイン語における非項の与格構文、つまり動詞によって選択されない項が与格で文に統合される構文を取り上げ、それらの言語に共通してみられる中心的与格構文と言語によって異なる周辺の与格構文について、認知的な観点から考察を行ったものである。与格構文はインド＝ヨーロッパ語族の多くの言語に見られるものであり、この論文では特に「部分の与格構文」と「利害の与格構文」を中心に論じている。論文では、この構文での与格の機能を認知的な観点から見ると、対象経由でプロファイルされた主体のマーカーであるとみなせること、「部分の与格構文」と「利害の与格構文」では、主体をプロファイルする過程の違いから「被

影響性」の認められ方に違いがあることを指摘している。また、「部分の与格構文」の制約が言語間で大きな違いがないのに対し、「利害の与格構文」「経験者の与格構文」の制約は言語によってかなり異なっており、そこには様々な要因が関与していることを明らかにしている。

第 III 部の「意味の広がり」では、語彙や文法的形態の使われ方に注目した論文を集めた。III の部分は、類似表現の背後にあるシステムの違いあるいは関連する要因の異同について論じた楊論文、金水・岡崎・曹論文、藤井論文、中澤論文、表面的な構造と背後のシステムの関係性を共通性と個別性の両面から論じた井上・生越・木村論文、ある表現をもとに言語に普遍的に存在するシステムについて論じた定延論文の 6 編からなる。

井上優・生越直樹・木村英樹の「テンス・アスペクトの比較対照——日本語・朝鮮語・中国語」は、日朝中の 3 言語において、(1) テンス・アスペクト体系の基本的な枠組みを形づくる概念、(2) その基本的枠組みの運用方法、およびテンス・アスペクト形式の具体的な役割分担を明らかにしようとする論文である。この論文では、各言語に対する従来の体系記述に必ずしも捕らわれず、できるだけ具体的な場面における各形式の使われ方および言語間の異同をもとに、その背後にある枠組みと運用方法を明らかにしようとしている。考察を通して、第一に、日本語・朝鮮語ではテンス・アスペクトとも基礎となる概念、基本的な枠組みが同じであるが、その基本枠の運用の基盤となる時間軸の構成様式が異なるため、形式の役割分担にずれが生ずること、第二に、中国語ではアスペクト接尾辞の性格が日本語・朝鮮語のアスペクトと基本的に異なるにもかかわらず、副詞や語気助詞を使うことによって、全体としては日本語・朝鮮語のアスペクトとも通じる体系を形づくっていることを明らかにした。その結果、テンス・アスペクト体系の普遍性と多様性を考えるには基本的な枠組みと最終的な運用状況という 2 つの側面を考慮する必要があるとする。

楊凱榮の「「も」と“也”——数量強調における相違を中心に」は、基本義として類似事態の追加を表す日本語「も」と中国語“也”を取り上げ、それらの語が数量詞と共起するとき、「も」が大数量強調を表すのに対し、“也”はそういう意味にならない点について考察したものである。論文ではまず、日本語の「数量詞+も」によって表される大数量強調が期待値超過によるも

のであり、述語や文脈を考慮に入れる必要がなく、この点は「名詞＋も」によって表される「意外性」とは異なることを指摘する。一方、中国語の「也」の場合、「也＋数量詞」では数量詞が「也」のスコープに入らないので、数量強調ができず、「数量詞＋也」ならば、数量強調は可能であるが、大数量だけでなく、小数量強調も可能になる。そして、このような日本語との違いは、中国語の「数量詞＋也」という形式が一種の譲歩文として用いられることに起因するものであるとする。

定延利之の「時間から空間へ？——〈空間的分布を表す時間語彙〉をめぐって」は、人間にとって時間より空間の方が基本的だという従来の考え方の問題点を指摘し、人間と環境のインタラクションに注目した新たな観点の必要性を示したものである。この論文は、まず、〈空間的分布を表す時間語彙〉という現象を指摘し、これが「空間は時間よりもわかりやすく基本的」という多数説に反することを示す。そして、この現象を説明するためには個人と未知空間との間で行われる、探索というインタラクションに注目する必要があることを述べる。さらに、この現象の分析から、探索が状態をデキゴト化することを指摘し、新たなデキゴトモデルを提案している。その上で、〈空間的分布を表す時間語彙〉に関して日本語と中国語を対照し、両言語の違いがデキゴトのくくり方・区切り方の違いによることを明らかにした。

金水敏・岡崎友子・曹美庚の「指示詞の歴史的・対照言語学的研究——日本語・韓国語・トルコ語」は、いずれも3系列の指示詞を持つ現代日本語、現代韓国語、トルコ語の指示詞の用法を対照的な観点から検討し、同時に日本語の指示詞体系の歴史的変遷も見ることにより、指示詞の体系に見られる共通性と個別性を明らかにしようとした。考察の結果、まず、これらの言語において近称にはほとんど目立った違いがなく、また遠称も概ね類似していることを指摘している。その一方、中称は、どの言語でもその分布や用法が複雑であり、一貫した説明を与えにくい性質を持っているという点では各言語共通しているとする。

藤井聖子の「所謂「逆条件」のカテゴリー化をめぐって——日本語と英語の分析から」は、言語間で類似しているが微妙に異なる意味文法カテゴリーをどのように分析するかを考えるため、日本語の「テモ接続構文」と「EVEN IF 接続構文」を分析の対象とし、その共通性と個別性を探ったものである。